

スピノザ『知性改善論』における「真の観念」の分析

黒川 勲*・阿 娜**

【要 旨】 スピノザ哲学の方法は真の観念の反省として捉えられ、『知性改善論』において論じられている。本稿では、『知性改善論』におけるスピノザの真の観念の分析を検討することにより、真の観念の特徴の解明を試みる。

スピノザの理解する真の観念は、確実性と真理性に関して、存在論的には独立性を認識論的には完結性を有するという内的特徴をもつ。そして、その内的特徴とは、なによりもまず単純性と明晰判明性なのである。

【キーワード】 真の観念 反省的認識 内的特徴 単純性

はじめに

目的地が定まれば、そこに至る道が次に求められなければならない。スピノザは主著『エチカ』の序論あるいは方法論と目される『知性改善論』において、自らの哲学の目的を「不断最高の喜びの永遠な享受」、「永遠無限なものに対する愛」と呼び、人間の最高完全性を「全自然と精神の合一性の認識 (cognitio unionis, quam mens cum tota Natura habet)」と定める¹⁾。

スピノザにとって、善とはその喜びへと自らを導く道として役立つものであり、またその喜びをできる限り他の人々と共に享受することにある。スピノザは前者を「真の善」、後者を「最高の善」と呼ぶ。喜びを他の人々と共に享受する最高の善は、他の人々との共同生活全体、つまり社会においてのみ達成されうる。最高の善を達成するためには良い社会を形成して行かななければならない。そして、良い社会を形成するためには自然の本性の認識に基づいた道徳哲学、教育学、医学、機械学が整備されなければならない。しかし、この最高の善は本質的に全自然と精神の合一性の認識の獲得によって達成されるものであり、またその基礎を諸学問の整備に負っている²⁾。

それ故に、まず真の善としての、全自然と精神の合一性の認識における「認識」を真たらしめる道であり、方法たるものが求められなければならない。

「何よりも先に知性を矯正し、それをできる限り浄化し、その結果首尾よく、誤りなしに、できるだけ正しく、事物を理解するための方法を考え出さなければならない。」(16 節)

平成 24 年 5 月 31 日受理

*くろかわ・いさお 大分大学教育福祉科学部社会認識教育講座 (哲学)

**あ・な 大分大学大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修

まさに、『知性改善論』の主題を示す表題の全体が、『知性の改善に関する、並びに知性が事物の真の認識に導かれるための最善の道に関する論文 (Tractatus de intellectus emendatine, et via, qua optime in veram rerum cognitionem dirigitur)』とされる所以である。

本稿の目的は、スピノザ哲学における方法論の解明に位置づけられるが、特に方法論の中核となるスピノザの「真の観念 (idea vera)」の分析を考察することにより、真の観念の特徴とともにスピノザの方法の特徴的な性格を浮き彫りにすることにある。まず、考察の論点として注目する『知性改善論』の言表は次の二つの節である。

「むしろ、方法は真の観念を他の諸知覚から区別して、その本性を探求し、真の観念がいかなるものであるかを理解することに、そしてその結果我々の理解能力を知り、理解すべきすべてをその規範に従って捉えるよう精神を制御することに、またそのための補助手段として確実な規則を与え、精神を無益なものから煩わされないよう配慮することにある。」(37 節)

「それ故に、方法とは反省的認識あるいは観念の観念に他ならないことが帰結される。そしてまず観念がなければ観念の観念はありえないから、与えられた真の観念の規範に従って精神がどのように導かれるかを示す方法が正しい方法である。」(38 節)

37 節においては真の観念の分析として、主に真の観念を他の諸知覚からの区別という問題が示されている。この分析は『知性改善論』「方法の第一部」と名付けられた考察に該当する。真の観念の特徴を明らかにする本稿の目的のためには、「方法の第一部」の読解が一つの課題となる。また、38 節においてはスピノザの方法についての特徴が、「反省的認識あるいは観念の観念 (cognitio reflexiva aut idea ideae)」と端的に示されている。スピノザの方法の特徴的な性格を明らかにする本稿の目的のためには、「反省的認識あるいは観念の観念」の意義を把握することがもう一つの課題となる。続いて、これら二つの課題に取り組むために、『知性改善論』の著述の順序に従って、まず「反省的認識あるいは観念の観念」の意義について論述を開始したい。

I 反省的認識あるいは観念の観念

スピノザは方法とは真の観念の反省であると主張し、その理由を『知性改善論』17 節—35 節において論じている。

『知性改善論』の目的は、事物を誤りなしに正しく理解する、すなわち「事物を真正に認識する」ための方法の発見と完成である。そのためには、まずこれまで用いられて来た「知覚様式 (modus percipiendi)」を検証し、最善の知覚様式を選択しておかなければならない。スピノザは用いられて来た知覚様式を次の四つに還元する³⁾。

- (A) 聞き覚え、慣習的記号からの知覚
- (B) 漠然とした経験からの知覚
- (C) その本質が他の事物から結論される知覚
- (D) その本質のみによる、あるいはその最近原因による知覚

およそ真正な認識とは、その事物の本質を知性によって認識することであるから、(A)の知覚が不確実であることは明らかである。(B)の知覚は知性によるものではなく、またその知覚からは事物の「偶有性 (*accidentia*)」の他に何も知ることはできない。しかも、その偶有性の知覚は、認識の順序として、偶有性が帰属する本質がまず認識されなくては明瞭に理解されえない。(C)の知覚はいわば帰納、あるいは演繹という論理的推論による知覚であるが、帰納によっては結果において理解されたもの以外、原因について理解することはできない。それは原因の本質ではなく、原因の「特性 (*propria*)」の理解にとどまるのである。一方、何らかの特性をとともなう普遍的概念から結論する演繹は、誤謬の危険なしに結論を下しうると言える。しかし、それもまた普遍的概念の分析による事物の特性の理解にとどまり、この事物そのものの「特殊的本質 (*essentia particularis*)」を理解していることにはならない。すなわち、(A)、(B)、(C)の知覚様式は真正な認識として不十分なものであることが確認される。そして最後に、スピノザは事物の本質の知性による認識の様式として、(D)「その本質のみによる、あるいはその最近原因による知覚 (*perceptio est, ubi res percipitur per solam suam essentiam, vel per cognitionem suae proximae causae*)」を選択するのである⁴⁾。

このようにして、スピノザは最善の知覚様式を確定し、続いてその様式によって認識する方法の考察に移るが、ここでスピノザは方法の発見について独自の見解を示す。

「真理探究の最善の方法を見いだすためには、この真理探究の方法を探求する他の方法は必要ではなく、また第二の方法を探求するための他の第三の方法が必要なわけではない。」
(30 節)

スピノザは方法発見のためには、その発見のための方法がさらに必要であるという「方法の無限遡行」を退ける⁵⁾。人間はまず「生得の道具 (*innatum instrumentum*)」を用いて、よりよい道具を作り、次第により仕事をなし、さらにより道具の作出へと進んで行く。方法発見においても同様に、人間は「生得の力 (*vis sua nativa*)」をもって「知的道具 (*instrumenta intellectualia*)」を作り、さらによりよい知的行動をなすことができるのである。そして、スピノザは知性を生得の力、真の観念を生得の道具と見なし、「与えられた (*data*)」ものと捉えている。それ故に、スピノザにおける方法の発見と完成の始源は、すでに与えられている知性による真の観念の分析となる。

続く『知性改善論』33 節–35 節において、スピノザは真の観念の分析により、真の観念の基本的な特徴を抽出する。スピノザは真の観念について次のように述べる。

「真の観念 (実際、我々は真の観念をもっているから) は、その対象とは異なるものである。なぜなら、円と円の観念とは別のものであるから。というのは、円の観念は円のように円周と中心をもつものではないからである。同様にまた、身体の観念は身体そのものではない。そして、観念が対象と異なるものであるからには、それ自体で、理解されうるものであろう。すなわち、観念はその形相的本質に関して見れば他の想念的本質の対象でありうるのである。さらに、この他の想念的本質はまたそれ自身において見れば、実在的な理解されうるものであろう。そのようにして無際限に進む。」(33 節)

スピノザにおいて真の観念とは、その観念の「対象 (ideatum, objectum)」とは「異なるもの (diversum)」であり、他の観念の対象となりうる「実在的なもの (quid reale)」として、対象によって、あるいは他のなにかによって理解されるものではなく、「それ自体で理解されるもの (per se aliquid intelligibile)」, 個別的で実在的な独立性をもつものである。

一方、スピノザは存在において無際限な対象化を可能とする真の観念について、認識において真正な認識とは、その事物についての真に観念を得るのみで十分であることを指摘する。すなわち、ペテロについて真に知るとは、ペテロの本質についての真の観念を得ることであり、ペテロについて真に知ることを知る、すなわちペテロの本質の真の観念の観念を理解する必要はないのである。私が何事かを知るならば、すでに知っているのであり、さらにその知っていることを知り、私が何事かを知っていることの正しさを他からあるいは外から確認する必要はない。このことから、スピノザは次のように述べ、さらに真の観念の特徴を指摘する。

「これからして、確実性とは想念的本質そのもの以外の何ものでもない。言い換えれば、形相的本質を感受する様式の中にこそ確実性そのものがあることが明らかである。これによってさらに、真理であることが確かになるためには、真の観念をもつこと以外の他の標識を必要としないことが明らかである。なぜなら、すでに示したように、私が知るためには知っていることを知る必要がないからである。」(35 節)

すなわち、知っていること、真の観念・「想念的本質 (essentia objectiva)」を有していることそのものが、知っていることの正しさと「確実性 (certitudo)」を全体で示しているのである。そして、この確実性は「形相的本質を感受する様式 (modus, quo sentimus essentiam formalem)」に言い換えられる。つまり、真の観念の確実性とは形相的本質(観念の対象の本質)との関係で見るとき、真の観念そのものに内在する、対象をいかにして把握しているかという様式・仕方があるのであり、まさに真理であることが確かになるためには、真の観念をもつこと以外の他の「標識 (signo)」を必要としないのである⁶⁾。

これまで、本稿の課題の一つ「反省的認識あるいは観念の観念」の意義について、『知性改善論』17 節-35 節に従って考察してきた。スピノザにおいて方法が、反省的認識あるいは観念の観念に他ならないと考えられる所以は、スピノザの方法と真の観念に関する独自の見解にある。スピノザは「方法の無限遡行」を退けうると考え、人間は生得の知性の力を有し、真の観念を生得の道具・方法の発見と完成の始源として与えられていると見なす。そして、その方法の始源である真の観念は、スピノザにおいて対象のたんなる対応物・附帯物ではなく、個別的で実在的な独立性をもつ、すなわちそれ自体で理解される自身の本質を有するという、基本的な特徴をもつ。そして同時に、真の観念はその確実性や真理性の標識を自身の外部にはなく、内部にもち「真理であることを自ら明らかにする (veritas se ipsam patefacit)」, 確実性や真理性において自己完結性と能動性を特徴としてもつのである⁷⁾。こうした、二つの基本的な特徴を有する故に、スピノザにおいて真正な認識のための方法は、「真の規範 (verae ideae norma)」をそれ自身の内にもつ真の観念自体を対象とする認識、真の観念の反省的認識あるいは観念の観念でなければならないのである。

II 真の観念の他の諸知覚からの区別

スピノザは真の観念の本性を探求するために、『知性改善論』「方法の第一部」として、真の観念と他の諸知覚—「虚構の観念 (idea ficta)」、 「虚偽の観念 (idea falsa)」、 「疑わしい観念 (idea dubia)」—との区別を 50 節—80 節において行っている⁸⁾。続いて、これらの諸知覚との区別による相違点を見て行くことによって、真の観念の特徴を明らかにして行きたい。

1 虚構の観念

まず、虚構された観念についてである。スピノザは「すべての知覚は、存在していると考えられる事物についてなされるか、本質についてのみなされるかである」(52 節)として、「虚構 (fictio)」についてもこの二つの区分に従って検証して行く。すなわち、「存在に関する虚構」と「本質に関する虚構」である。

まず、存在に関する虚構について、スピノザは、その虚構の成立する条件を次のように述べる。

「たんに可能的なものに関するだけで、必然的なもの、そして不可能なものに関しては起こりえない」(52 節)

つまり、「存在することがその本性に矛盾する不可能なこと」、「存在しないことがその本性に矛盾する必然的なこと」に関しては起こらず、「それが存在してもしなくても本性に矛盾しない可能的なこと」に関して、「その存在の必然性及び不可能性の外的原因を知らない場合」に、虚構は生じるのである。存在に関する虚構の成立条件は、その存在の成否が本性に矛盾しないこと、そしてその存在の外的原因に関する無知である。

このように、存在に関する虚構の成立条件が捉えられるならば、虚構を退けるための方法は明らかである。まず、その事物の本性を知り、その存在に関して矛盾の有無を検証することである。その存在が本性に照らして、「不可能 (impossibilia)」及び「必然的 (necessaria)」なものであるならば、その事物について存在を虚構することはありえない。続いて、その存在の外的原因を知ることである。その存在が本性に照らして「可能 (possibilia)」であるものについては、その存在の成否は「外的原因 (causa externa)」に依存するのであるから、この外的原因を知るならばその事物について存在を虚構することはできないからである。また、スピノザは注意に値する事項として次のように述べている。

「存在はより一般的に考えられるほど混乱して考えられ、より容易に様々な事物に付加される。一方、より特殊的に考えられる場合には、より明晰に考えられ、自然の秩序に注意せずに、そのもの以外の他のものに付加されることがより困難となる。」(55 節)

この注意をも合わせて考えるならば、その存在の成否を決定する外的原因・「自然の秩序 (naturae ordo)」を知り、その存在を「特殊的 (particularis)」に考える時、虚構をもちや成しえないのである。このように、存在に関する虚構を退ける方法は、その事物の本性の認識、外的原因・自然の秩序の認識、そしてその存在の特殊的な認識である。とりわけ、まずその事

物の本性の認識が必要なのであるから、事物の本質に関する虚構が看破されない限り、存在に関する虚構を避ける方法は成立しえない。続いて、この本質に関する虚構を見て行きたい。

本質に関する虚構について、スピノザは、その虚構の成立する条件を次のように述べる。

「虚構された観念は明晰判明ではありえず、全く混乱したものであり、すべての混乱は、まとまったあるいは多くのものから合成された事物を、ただ部分的にのみ知り、知られたものを知られていないものから区別しないこと、更に各々の事物に含まれる多くのものに区別することなしに同時に注意することから、生じるのである。」(63 節)

本質に関する虚構のもとには「混乱した (confusa)」認識がある。この混乱した認識を回避することが、本質に関する虚構を退ける方法である。スピノザは、「精神がより少なく知解し、より多くのことを知覚するほど、より大きな虚構能力をもつ」(58 節) ことに注意しているが、この観点を合わせて考えるならば、合成された事物の本質を部分に分割し区別し、別々に注意して理解に努めるということが、この虚構を避ける方法となるだろう。なぜなら、スピノザにおいて最も部分的なものは、最も「単純 (simplex)」であり、単純なものは全体的に認識される故に「明晰判明 (clarus et distinctus)」であり、従って真だからである。そして、真のものから合成されるものも、真であり、虚構とはなりえないのである。

これまで二種類の虚構及びそれらを退ける方法を見て来たが、これらを踏まえて、真の観念の本性について指摘するならば、真の観念は事物の想念の本質であり、事物の本質の認識そのものなのであるから、事物の本質の認識の特徴が、直ちに真の観念の特徴となるだろう。すなわち、単純であること及び単純なものから合成されていることが、まず真の観念の特徴として捉えられなければならない。

2 虚偽の観念

次に、虚偽の観念についてである。スピノザは、虚偽の観念は虚構の観念とただ「承認 (assensus)」を含んでいる点においてのみ異なると考える。虚偽は虚構と異なり、自分自身が真実であると思ひ込み、判断し肯定しているものなのである。虚偽は虚構とは、この承認においてのみ相違するものであるから、スピノザは虚構についてと同様に、虚偽を存在に関するものと本質に関するものの二つに分け、虚偽を避ける方法も虚構を避ける方法と同一であるとしている。つまり、存在に関する虚偽について、その虚偽を退ける方法は、虚構について述べたように、その事物の本性の認識、外的原因・自然の秩序の認識、そしてその存在の特殊的な認識となるであろう。また、本質に関する虚偽については、その虚偽は混乱したものであるから、明晰判明な認識を行うために、合成された事物の本質を部分に分割し区別し、別々に注意して理解に努めることに存するであろう。

「明晰判明な観念は決して虚偽ではありえない。なぜなら、明晰判明に認識される事物の観念は最も単純なものであるか、あるいは最も単純なものから合成されたもの、言い換えれば、最も単純なものから導き出されたものだからである。そして、最も単純な観念は偽でありえない。」(68 節)

これらが虚偽の観念の本性と回避の方法であるが、この虚偽の観念の言及に続けて、スピノザは直接的に「真なるものの形相 (*forma veri*)」について、69節-73節において述べている。次に、真の観念の考察にあたり、スピノザのこの言及を見て行きたい。

スピノザは、この真理の形相、あるいは「真理の規範 (*veritatis norma*)」について、もしある建築師がある建築物を秩序正しく考えるならば、現在および将来その建築物が存在しなくてもその思惟は真であり、またある人がペテロが存在することを知らないのに存在すると言明するならば、実際にペテロが存在しているとしてもその思惟は誤りである、という例をあげ、観念は対象の存在との関係を離れて、観念そのものの中に真を偽から区別する「実在的なあるもの (*aliquid reale*)」を有すると主張する。スピノザは次のように述べる。

「ところで真なるものの形相を構成するものに関して言えば、真なる思惟は、たんに外的特徴によってだけではなく、むしろ内的特徴によって偽なるものから区別される。」(69節)

そして、真理の形相は「内的特徴 (*denominatio intrinseca*)」として、思惟自体の内部に存在し、外部の対象を原因とするのではなく、「知性の能力と本性そのもの」に依拠しているとされるのである。

そこでスピノザは、その対象が自然の中に存在せず、思惟力のみ依存して成立する球の概念をあげて、真理の形相を究明しようとする。つまり、ある原因によって半円が直径の回りを回転して球が生ずるという観念は、自然におけるどのような球もこのようにして生じたことがないにもかかわらず、真である。それゆえ、この球の真なる観念の形相は球の観念の内に求めようのであるが、しかし半円の回転運動は球の概念、あるいは回転運動の原因の概念と結びつかなければ誤りである。なぜなら、虚偽とは事物の概念に含まれていない事柄に同意することであるが、半円の回転運動の概念は、回転運動という半円の概念に含まれていない事柄を肯定しているからである。半円の回転運動という概念が真であるためには、半円および回転運動を合成する原因の概念による必然性が必要なのである。また、スピノザはこのことから再び「単純な思惟は真でしかありえない」(72節)ことを指摘する。なぜなら、単純な概念に含まれる肯定は、その概念とまったく合致して、その概念を越え出ないからである。先の球の例で言えば、半円・回転運動の概念それぞれに含まれる肯定は、その単純性から概念に合致して概念領域を越え出る可能性がなく真であり、またある原因による半円の回転運動という合成された事態が示す肯定が、原因概念による必然性を踏まえて、球そのものの概念領域を越え出ない限りにおいてのみ真なのである。このようにしてスピノザは、真理の思惟の形相として、概念の肯定と概念領域との合致及び原因概念による必然性を考えるのである。

これまで、真の思惟の形相についてスピノザの言及を見て来た。すなわち、真の思惟の形相とは、概念の肯定との合致及び原因概念による必然性であった。このことを理解したうえで、真の観念について言うならば、真の思惟は真の観念に外ならない故に、真の思惟の形相が真の観念の特徴として考えられるであろう。真の観念はその単純性・明晰判明性の内容として、概念の肯定と概念領域との合致という特徴もつのである。また、原因概念による必然性を含んでいるという特徴をもつのである。

3 疑わしい観念

最後に疑わしい観念についてである。スピノザによれば、疑いとはある肯定、あるいは否定に関する「判断の停止 (suspensio animi)」である。また、スピノザは疑わしい観念について次のように述べる。

「どんな疑いも、それについて疑われる事物だけでは精神の中に生じない。・・・むしろ、疑われる事物について、ある確かなものがそこから結論できるほど明晰判明でない他の観念によって生ずるのである。」(78 節)

すなわち、疑わしい観念の成立条件は、肯定否定の判断を停止させる明晰判明でない他の観念である。この疑わしい観念を退ける方法は、その成立条件から明らかである。つまり、明晰判明な他の観念をもつことである。スピノザが「欺く神 (aliquis Deus deceptor)」の例をもって説明しているように、欺く神が存在しているかもしれないという理由で真の観念を疑うるのは、神について明晰判明な観念をもっていない限りにおいてであり、神が欺くものでないことを明晰判明に知る限り疑いは除かれるのである⁹⁾。

このことを真の観念について考えれば、明晰判明な観念である真の観念は、決して疑わしい観念を生み出すことはない。むしろ、疑いを除去し判断を促す結果をもたらすだろう。なぜなら、疑いは明晰判明でない他の観念によってのみ生じ、その観念が判断を停止させるのであるが、その明晰判明でない他の観念を検証し、明晰判明すなわち真の観念を再形成するならば、疑いは除かれ、それによって判断の停止も除かれるからである。

結語

これまで、スピノザによる真の観念の分析を考察することによって、真の観念の特徴とともにスピノザの方法の特徴的な性格の解明を行ってきた。すなわち、真の観念とは、まず対象のたんなる対応物・附帯物ではなく、存在論的に個別的で実在的な独立性をもつものである。そして、真の観念はその確実性や真理性の標識を、外部にではなく内部に有する認識論的な自己完結性を持ち、同時に真理であることを自ら明らかにする能動性をもつものである。それ故に、スピノザにおいて真正な認識のための方法は、なによりもまず、真理の規範をそれ自身の内にもつ真の観念自体を対象とする認識、すなわち真の観念の反省的認識でなければならないのである¹⁰⁾。

こうした二つの基本的特徴を踏まえて、さらに具体的な真の観念の特徴について述べるならば、真の観念は虚構・虚偽等とは決定的に異なる単純性を示している。真の観念は単純な観念あるいは単純な観念から合成されている観念である。そして、単純性は明晰判明性を意味しているが、単純性・明晰判明性の内実として、概念の肯定と概念領域との合致という特徴もつ。また、合成された観念ならば、原因概念による必然性を含んでいるという特徴もっているのである。

註

『知性改善論』の原典は、Spinoza: *Tractatus de intellectus emendatine*, Opera Bd. II, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, Carl Winter, 1972.を用いた。なお、本稿本文中における『知性改善論』からの主な引用文には、ブルダー版による文節番号を引用文末尾に表記する。

- 1) 『知性改善論』13節
- 2) 『知性改善論』14節-15節
- 3) 『知性改善論』19節
- 4) 四つの知覚様式の検証と最善の知覚様式の選択については、『知性改善論』26節-29節
- 5) 無限遡行の問題を含め、スピノザの方法については國分功一郎氏の詳細な研究があり、参考とした。國分功一郎、『スピノザの方法』, 第一部「二つの逆説」, みすず書房, 2011
- 6) 國分 (2011), pp. 48-49
- 7) スピノザは、『知性改善論』と『エチカ』とを一貫して、真の観念の内在的な確実性及び能動性を確信し主張している。同種の表現は『エチカ』第二部定理 43 注解において、「光が自らと闇とを明らかにすると同じように、真理は真理自身と虚偽との規範である」「真理は真理自身の規範である」などに見られる。また、真の観念の内的特徴については、『エチカ』第二部定義 4 に直接的な言及がある。(Spinoza: *Ethica*, Opera Bd. II, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, Carl Winter, 1972.)
この真の観念の内在的な確実性及び能動性、「真の観念の自立的な力能」を捉える思想が、スピノザの哲学を特徴づけると考えられる。真の観念は自らを肯定するのであるから、従来考えられてきた観念を形成する知性、その観念を肯定あるいは否定する意志、すなわち認識主体としての人間精神の存在と役割は問い直さざるをえなくなる。むしろ、スピノザは私たち人間が真の観念をもつにしても、虚構や虚偽などの「知覚の欠陥 (*defectum nostrae perceptionis*)」をもつにしても、それは私たち人間の認識活動の結果と考えるのではなく、ある大きな思惟する存在の認識活動の結果の一部が私たちの人間精神において成立している、と彼の発想を展開して行くだらう。(『知性改善論』73節)
- 8) 『知性改善論』「方法の第一部」は真の観念と他の知覚の区別を主題としているが、この考察は「睡眠と覚醒」あるいは「欺く神」などの言及から、デカルトの方法的懐疑とその過程を明らかに意識しているものと考えられる。
- 9) この疑わしい観念に関する「欺く神」のスピノザの言及は、よく知られたデカルト『省察』の方法的懐疑の最終段階で登場する「欺く神」を念頭に置いている。ここで述べているように、スピノザはデカルト的懐疑が可能であるのは、神について明晰判明でない混乱した観念をもつためであり、神について明晰判明な観念をもつならば、懐疑は氷解すると考えている。同様の見解はスピノザ『デカルトの哲学原理』第一部緒論にもある。(Spinoza: *Renati des cartes principiorum philosophiae, pars I, prolegomenon*. Opera Bd. I., im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, Carl Winter, 1972., pp.145-149)
デカルト及びスピノザの「欺く神」をめぐる両者の見解には、各人の真理観が端的に表れているように思われる。すなわち、真理をあらゆる外の観点からの検証に耐えうるものでなければならぬと考えるデカルトに対して、スピノザは真理は自ら明らかとする力を持ち、それ故に外からの検証は不要であると考えるのである。
- 10) このようにして、スピノザは真の観念の反省的認識として、真理の規範とそれに従うための精神の制御法を獲得することになるが、一方で完全な方法は、与えられた・真の「最高完全者の観

念 (idea entis perfectissimi)」の反省的認識により得られると主張する (『知性改善論』38 節)。また、この最高完全者の観念とは「全自然の根源と源泉を再現する観念 (idea, quae refert originem et fontem totius naturae)」とも述べている (『知性改善論』42 節)。しかしながら、『知性改善論』において最高完全者の観念は得られず、その意味では『知性改善論』は内容的にも事実としても未完に終わっている。

この点に注目して、『知性改善論』から『エチカ』への連続性について言及するならば、スピノザ哲学の目的は「永遠無限なものに対する愛」であり、それは「全自然と精神の合一性の認識」のよって可能となる。そして、その認識に至るために方法の完成に関して、『知性改善論』で要請された最高の真の観念が最高完全者の観念であった。一方、永遠無限なもの、全自然の根源、最高完全者と呼ばれる存在こそ、スピノザ哲学においては神である。そしてまさに、この神の概念の確立を『エチカ』第 1 部「神について」が担っているのである。

そうしてみるならば、『知性改善論』から『エチカ』への連続性に関する一つの見解として、方法の完成を目指す「方法論の継続」と解釈することも可能である。しかしながら、『エチカ』第 1 部において神概念は確立されるが、その最高完全者の観念の反省によって、スピノザが方法を完成させたという形跡はない。むしろ、事情は次のようなことではないか。すなわち、神は方法の完成のために確かに要請された概念であるが、その要請に応答し神の概念が得られた地点はもうすでに、哲学の目的である「神に対する愛」及び「神と精神との合一性の認識」に近接しており、さらに方法を完成させることよりも、目的に邁進すること（神を愛すること合一性を認識すること）が本来的であることが明らかとなったということである。スピノザにおいて、Logica が求める地点こそ、Ethica の始点なのである。それ故に、スピノザは『エチカ』第 2 部以降において、人間精神を神の概念によって反省し、人間精神を神の中に位置づけながら、「神に対する愛」及び「神と精神との合一性の認識」へと向かって行くのである。

付記：本稿は平成 24 年度日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金・基盤研究 C）による研究成果の一部である。

Spinoza's Analysis of "idea vera"

KUROKAWA, Isao and A, Na

Abstract

In this paper we tried to understand the properties of "idea vera" or the true idea in Spinoza's philosophy. For this purpose we regarded the investigation into Spinoza's analysis of the true idea in his earlier work, *Treatise on the emendation of the intellect*. According to Spinoza, the

true idea in itself has the properties that are independence from object of the idea and self-contained character about certainly of the idea. Spinoza considers these properties to be the intrinsic denomination of the true idea. And the intrinsic denomination signifies simplicity and clearness and distinctness that the true ideas express.

【Key Words】 true idea, reflective knowledge,
intrinsic denomination, simplicity